

2020年度はCOVID-19のパンデミックにより例年とは異なる体制で診療を行った。年度開始前から発熱者外来を開設した。県からの要請によりCOVID-19感染患者の入院受入を決定し、地域包括病棟の一部をCOVID-19専用病棟として準備を行った。流行の増大に従い当院への受入が増加し、最大時は準備した8床すべてを使用するまでに至った。COVID-19患者の診療はすべて藤本副院長が担当した。

診療体制自体は前年と変わりなく、常勤医11人＋外来非常勤医の体制で診療を行った。

外来体制は、循環器科・呼吸器科・消化器科・外科・泌尿器科・脳神経外科・整形外科・心臓血管外科・内科外来の他に乳腺外来・大腸肛門外来・糖尿病外来・肝臓外来・腎不全外来・禁煙外来の特殊外来などに変化は無く、新患者数3,094名、年間の総受診者数は35,301名である。紹介患者は1,489名だった。COVID-19流行のため外来受診を控える傾向が見られた。

救急外来はCOVID-19流行のため常に感染のリスクにさらされており緊張を要した。実際に救急搬入患者から感染が判明した事例もあった。救急外来では、年間の受診者は3,272名で、救急車搬入では718名を受け入れた。救急外来から623名が入院となった。

総入院患者数は37,377名で、病棟別入院患者数は、一般病棟13,158名、地域包括病棟10,991名、回復期病棟13,228名だった。各病棟の在院日数、病床利用率は、一般病棟14日／83.8%、地域包括病棟18.5日／66.9%、回復期病棟57.3日／90.6%だった。地域包括病棟の一部をCOVID-19専用病棟に変更したため地域包括病棟の利用は減少している。

外来化学療法室は、手術後の治療成績向上や、延命／緩和を目的として、生活の質を落とすことなく安全で最大限の効果を得られるように各スタッフの協力の下に行っている。

当院は、急性期治療を終えてリハビリを行い在宅復帰するための中間施設としての役割も担っているが、また退院した後も継続的に支援を行うために訪問リハと通所リハを備えている。2020年度は、訪問リハは延べ4,187回リハビリを提供しており例年と変わらなかった。一方、通所リハは延べ4,988回リハビリを提供したが大きく減少した。これもCOVID-19感染のリスクを抑えるため初回流行時にいったん中止したことによるものである。その後は感染対策を徹底して再開している。

予防医療として健診事業も行っており、2020年度は1,840名の検診を行った。

済生会の基本方針としての生活困窮者への生活全般への支

援をMSWが中心となり取り組んでいる。今年度は無料・低額医療は9.21%であり、目標の10%に近づいている。

地域医療研修のため当院では研修医を迎え入れている。今年度は済生会熊本病院と済生会横浜市南部病院から計6名が1ヵ月の研修を行った。急性期病院では経験することができない地域での医療の実態をみるほぼ初めての経験となっている。COVID-19の流行は研修にも影響し、横浜市南部病院からの受入は年度後半に集中して受け入れた。例年湯島診療所での離島研修を経験してもらい研修医には好評を博していたが、中止せざるを得ず残念であった。

COVID-19の流行は現在も続いており、次年度も現体制を維持し感染に最大限注意を行いながら今まで行ってきた医療の提供を続けていく予定である。